

「大学の神学」再訪

－組織神学としての「教育の神学」[教義学篇]－

Revisiting the Theology of the University

－Theology of Education as Systematic Theology: Dogmatics－

矢澤 励 太

要旨

キリスト教神学における創造論・救贖論・終末論はキリスト教高等教育の実践においても、その根拠・方法・目的を示し、その教育実践の支持基盤を構成している。父なる神が天地を創造されたという創造論においてキリスト教学術論の根拠が与えられている。子なる神が受肉と贖罪の実行に至るコミットメントを示されたのがこの世界であるという理解がキリスト教学術論に方法論的特徴を賦与する。聖霊なる神が個人を再生し、聖化させ、神のシャロームを実現するための学術研究に従事するという目的を指し示す。

キーワード：キリスト教高等教育 (Christian higher education) /

キリスト教教義学 (Christian dogmatics) / 三位一体論 (doctrine of the Trinity)

I はじめに

20世紀後半より、神学においては「三位一体的神学のルネサンス」(the Renaissance of trinitarian theology)とも呼ばれる、三位一体論への関心の高まりがみられる (Schwöbel, 1995)。パネンベルク (Wolfhart Pannenberg) やモルトマン (Jürgen Moltmann) をはじめ、クリストフ・シュベール (Christoph Schwöbel)、デイヴィッド・カニングハム (David Cunningham)、スタンレー・グレンツ (Stanley J. Grenz) といった研究者により現代における三位一体論の注目すべき展開が見られる¹。

しかしながら、ことキリスト教教育の実践において、これを教義学的アプローチの中で、特に三位一体論的に位置づけて論じ、その神学的基礎づけを行おうとする試みはきわめて限られているのが現状ではなかろうか。古屋安雄 (1991) は『大学の神学』において、近代科学の3領域区分である人文科学・社会科学・自然科学それぞれに子な

る神・聖霊なる神・父なる神のそれぞれがその学的営為の根拠となっている点を三位一体論的に展開しようとした。伊藤悟 (1996) は創造論・救贖論・終末論を視野にキリスト教高等教育における教育実践を論じており、この領域における数少ない研究のひとつといえる。現代アメリカにおける歴史学の泰斗マーク・ノル (Mark Noll) は『福音主義精神のつまずき』(The Scandal of Evangelical Mind, 1994) において、アメリカ・キリスト教福音主義における学術的精神基盤の脆弱さを問題としたが、その続編ともいえる『イエス・キリストと精神的生』(Jesus Christ and the Life of the Mind, 2013) においては、信条において表白されたイエス・キリストの神人両性をはじめとする教義学的信仰箇条が、学術的営為に関与する者の態度や姿勢、業績にどのような変化をもたらすのかを形式的に論じている。

さらに現代アメリカにおいては「福音主義学術運動」(evangelical scholar movement)とも呼ばれる、キリスト教信仰を学術研究の基本姿勢の中に明確に位置づけ、そこから展開されるキリスト教的学術研究の可能性を探る運動が認知され始めて

YAZAWA, Reita

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
キリスト教人間論、人間の探究

いる。その背景にある思想的基盤の一つは、西ミシガンに位置するカルヴィン大学を中心に推進されてきた、オランダの新カルヴィニズムを代表するアブラハム・カイパー (Abraham Kuyper) の神学思想である。カイパーは諸科学を一般恩恵論 (common grace) の中に位置づけ、罪人である人間の救済に関わる特殊恩恵 (special grace) とは区別される、人間の文化社会活動について人類共通の舞台設定を行った。その上でこの学術活動に、特殊恩恵をその身に帯びた信仰者がどのように学術活動の形成者・変革者として関与していくのかについて、その神学的道筋を示したのである。

本稿においては、古屋・伊藤・ノルらの先行研究に学びつつ、しかし特にカイパーのキリスト教学術論を参照しながら、キリスト教大学における学術研究の神学的根拠と姿勢および目標を教義学的・三位一体論的に提示することを目指す。

著名な教会史家のヤロスラフ・ペリカン (Jaroslav Pelikan) は、キリスト教大学における学術研究の三位一体論的基盤から生み出される研究者の姿勢と態度について、「御父がすべての存在の始原であり創造者であるがゆえの存在への情熱、イエス・キリストが御父の言葉であり精神であるがゆえの言語に対する畏敬、聖霊が歴史を通じて働き多様性を生み出すと同時に御自身にすべてのキリスト教人々を結び合わせるがゆえの歴史への熱情」を挙げている (Pelikan, 1961)²。本稿において追究するのも、こうした三位一体論的基盤がキリスト教学術研究の枠組みをどのように規定し導くのか、あるいは導くべきかという問いである。

教義学的にアプローチする場合、キリスト教神学における創造論・救贖論・終末論はキリスト教高等教育の実践においても、三位一体論的にその根拠・方法・目的を示し、その教育実践の支持基盤を構成している。このことを論証するために、以下第Ⅱ章においては、「父なる神」とその創造の御業にキリスト教学術論の根拠が見いだされることを論じる。第Ⅲ章では「子なる神」とその救いの御業にキリスト教学術論の方法論的視座が示されていることを論じる。第Ⅳ章では「聖霊なる神」の御業とその終末論的射程が、キリスト教学術論に目的論的方向づけを与えることを示す。

Ⅱ 創造論—キリスト教学術論の根拠

キリスト教教義学における基本的な世界理解は、この世界が創造主である神によって形づくられたというその被造性にある。この世界は悠久の昔から栄枯盛衰のパターンを永遠に繰り返しているわけではなく、多くの偶然が重なって発生した偶発的産物であるわけでもない。使徒信条が「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と告白するように、全能の神によって意志され、形づくられた被造世界である。

神ご自身とは区別され、対象化されてこの世界は存在している。その意味で自然世界は神そのものではない。自然を神化させ、神秘化する場合、自然の探究は神の聖性に触れる行為となり、禁忌すべき営為となる可能性がある。しかしキリスト教教義学の創造論においては、世界は神ご自身とは区別された被造世界であり、それゆえに自然世界とそこに生起する現象は、学術研究活動の対象となり得るのである。

このことは、世界が完全に非神話化されて人間の探究と支配・搾取の対象物と化してしまうことを意味するのではない。18世紀啓蒙主義の理神論 (deism) が主張したように、神は世界を創造された後、その世界関与を放棄して世界に埋め込まれた自己法則に基づく自律的運動に世界を委ねてしまったのではない。キリスト教教義学には「創造」の教理の中に「保持」の教理も位置づけられている。神は世界を創造したのみならず、造られたこの世界を守り支えておられる。それが、世界が崩壊せず、無に帰することもなく、今日も存在できていることの根拠である。

キリスト教学術論は汎神論というスキラも、理神論のカリュブデスも退ける。世界の継続的存在は自然世界から区別された、「神の意志的世界支持」があつてこそである。エーミル・ブルナー (Emil Brunner) が論じるように、「世界はあらゆる瞬間神によって無の深淵の上に《保持》されているのであり、世界はその深淵にいつでも転落するのであり、神が保持しないなら、直ちにその中に転落せざるを得ない」(ブルナー, 1997, 174)。神は創造した後も、その被造世界を保持しているのであり、世界関与の業を継続しているのである。

そこでこの世界は神が時間に先立って思い描いた「青写真」に基づいて創造されているのであるから、被造世界にはいわば神の指紋 (fingerprint) がここそこに看取されるはずである。ブルンナーが論じるように、「神は世界にその秩序を与え、まさにこの秩序において彼はくり返しその創造者精神と創造者の力を啓示する」のであり、それゆえに「秩序、規則は精神的創造の自由である」(ブルンナー, 1997, 173)。人間は神の精神を被造世界の探究を通して学ぶことができ、また神の言葉に導かれながら自然世界を探究することができるという確信が、キリスト教学術論の中核に位置している。

それではすでに創造の秩序の中に位置づけられていた学術的営為が、墮罪の影響を受けてどのような変質を遂げたのであろうか。そこに神の恵みの介入がある。この論点の豊かな可能性を、一般恩恵論 (common grace) の教理の展開を通して示したのがアブラハム・カイパー (Abraham Kuyper) である³。カイパーによれば、創造における人間の原初状態からの墮落は、そのままでは被造世界に対する審判と被造秩序の崩壊を意味したはずである。アダムに対して主なる神はこう命じていた。「ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる」(創世記 2 : 17)。ところが墮罪によって人間と世界が崩壊してしまうことはなかった。カイパーはすでにそこに神の恵みの介入を見る。それが「一般恩恵」である。一般恩恵は「それがなければ罪の帰結としてもたらされたであろう諸々の事柄を制限し、差し止め、あるいは方向付け直す」働きを担っている (Bratt ed., 1998, 168)。墮罪にも関わらず、世界がなお瓦解することなくその存在が保たれ、自然世界が機能し、生命が繁栄を享受し、歴史が継続していること自体に、世界一般に対する神の恵みの介入があるのだ。

これに対して「特殊恩恵」(special grace) は人間の救いに関わる神の恩寵である。イエス・キリストを信じる信仰を通して無償で与えられる罪の赦しと義認、救いという、この世界内での営為を超える人間の永遠へと向かう岐路を分ける恵みである。この世界に教会を位置づけ、神の救いへと選ばれた者を確実に救いへと導く神の恩寵であ

る。墮罪後の世界の存続と、その中における神の救済計画の進行を、区別と連関において整理叙述する教理として、カイパーは「一般恩恵」と「特殊恩恵」の教理を駆使したのである。

カイパーによれば、神が世界を創造されたその時から、科学は結婚や家族と並んで存在していた。国家や教会は、罪に堕ちた世界に対する神の恵みの介入として位置づけられるが、科学はたとえ墮罪がなくとも、教会や国家に依存しないその自律した存在根拠を持っていたというのである (Kuyper, 2011, 35)。アダムが生き物それぞれに名前を付けると、それがすべてその生き物の名前となった (創世記 2 : 19) という。この出来事の中に、カイパーはすでに対象の本質をとらえ、これを的確に表現する科学的探究の営みを見るのである (Kuyper, 2011, 57)。もちろん後に見るように、罪により科学ないし学術の性格は、本来の姿からは大きく変質を遂げてしまっている。しかし科学的営為が、創造されたこの世界に本来的な営為として位置づけられていたことにカイパーは注意を喚起するのである (Kuyper, 2011, 35)。

それではこのような被造世界の中に位置づけられた学術的営為とは本来どのような営みなのであろうか。カイパーはこのことを聖定論にまで遡って論じる。聖定論とは、世界創造にも先立つ、神の永遠の意志決定を論じる教義学の項目である。端的に言えば、この被造世界は永遠の昔における神の永遠の意志決定における神の精神、神の思考を反映しているのである。神の内なる独自の思考から神の聖定が発出し、さらにこの聖なる意志決定から世界が創造され、歴史が結果しているのである (Kuyper, 2011, 35)。それゆえに「あらゆる被造物はその起源、存在、進歩において、神が永遠において思考し、その意志決定 (decree) において確立した、一つなる、豊かで一貫した啓示を構成している」(Kuyper, 2011, 40) ののである。言い換えれば、「あらゆる事物は神の思考から、神の意識から、神の言葉から出ているのである」(Kuyper, 2011, 40)。被造物全体はいわば「目に見えるカーテンであり、その背後にはこの神の思考の至高の働きが輝き出ている」のである (Kuyper, 2011, 39)。それゆえに本来的な学術的営為とは、この被造世界に散りばめられている神

の思考の痕を辿り、これを発見し表現し顕在化することを通じて神の栄光を現す営みなのである。

この被造世界における神の思考の痕を辿る知的探究の主体として位置づけられているのが人間に他ならない。聖書によれば、人間は「神の似像」(God's image)として創造された。「神の似像」として創造された人間に与えられているのは、この「被造世界に埋め込まれ、具体化している神の思考」を確認し、「神が創造された時に被造世界に具現化されたその思考を内省する」仕方では把握することのできるちからなのである(Kuyper, 2011, 41)。そしてこの人間に与えられている能力は、墮罪後に新しく付け加えられたようなものではなく、人間の本質の基礎的なものとして本来的に人間に備わっているものなのである(Kuyper, 2011, 41)。「人間が被造世界から神の思考を内省するというこの能力を発揮する瞬間、そこに科学が生起している」のである(Kuyper, 2011, 42)。こうしてカイパーにおける科学の成立根拠として、永遠において神の内に神独自のアイデアないし思考があったこと、創造の御業において神がその思考をこの世界に埋め込み具現化したこと、そして神の似像として形づくられた人間にこの神の思考を把握し内省し、表現にもたらすちからが備えられたことの三点が挙げられるのである(Kuyper, 2011, 41-42)。

キリスト教教義学における創造論はこのようにしてキリスト教学術論にとってその営為が可能となるための根拠を提供している。学術的営為の舞台となるこの世界自体が、神の永遠の意志決定に発する被造物であり、人間の科学的使命はこの被造世界に内蔵された神の思考を読み取ることを通じて神の栄光を讃美することなのである。このカイパーの論点を三位一体論と契約の枠組みから以下にとらえ直してみたい。

神は創造に先立つ永遠の昔からご自身の内において充溢した喜びの交わりにある生ける神であった。それが父・子・聖霊なる神の三位一体の交わりである。それゆえに神ご自身の中に不足や欠けがあったわけではない。神は御自身の内で完全な愛の交わりである三位一体の交わりにある。それにも関わらず神が御自身と区別され、ご自身と対向する対象としてこの世界を創造されたのは、神

御自身の自由なる愛による。

18世紀のアメリカ・ニューイングランドに生きたジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards)はこの神の三位一体の愛の交わりを永遠の「幸福」(happiness)として表現した。神は御自身の内なる愛の交わりにおいて完全に充足し幸福である。しかし神はその自由において御自身と対向する世界を創造され、これを愛し、御自身の内なる愛と幸福の交わりにこれを招き入れることを喜ばれる。それゆえエドワーズは神の世界創造の理由を、神が自己を自己以外のものに伝達することをよしとされたからだという。この「自己伝達」の神論が、プロティノス的な流出論(emanation)に色濃く影響されると、汎在神論(panentheism)的な世界観を誘導する危険性はある。しかしこれを神の本質流出としての世界形成ととらえることは退けつつ、神の自由なる意志に基づく自己伝達(self-communication)の行為として創造を位置づけることができるのではないか。神の自己伝達行為としての世界創造は、神の永遠の愛の交わりへと被造物を招き導き、その至福に与らせる大いなる世界経綸の開始なのである。

契約神学の伝統はこの神の内なる三位一体の交わりの中に、既に世界を罪から贖うための「贖いの契約」(covenant of redemption)が位置づけられていたことを見る。父なる神が永遠の昔において、子なる神との間に、選ばれた神の民を罪から救い出すために、御子が贖いの小羊として犠牲となることについて契約を結んでいたとする教理である。被造世界における神の救済計画遂行は、この原契約に基づいているのである。世界史はこの神の内なる「根源的契約」(大木, 2003, 503)の経綸的展開なのである。教会は「キリストの体」として、この三位一体の交わりに招き入れられるために地上において召集された神の契約共同体にほかならない。この契約に生きる民はまた、学術研究においても、独自の視座をもって貢献できる可能性を秘めている。それが「神の似像」として形づくられたという人間理解をもって、神の思考の痕を辿ろうとする学術研究の営みである。その営為の最先端に位置しているのがキリスト教大学にほかならない。

Ⅲ 救贖論—キリスト教学術論の方法

使徒信条の第二項は告白する。「我はその独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりて宿り、乙女マリアより生まれ、ポンテオ・ピラトの下に苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に降り、三日目に死人のうちより甦り、天に昇り、全能の父の右に座し給えり。かしこより来りて、生けるものと死ぬるものとを審き給わん」。前章で見たように、キリスト教教理はキリスト教学術論に対してその活動基盤としての被造世界を創造論を通じて指し示し、もってキリスト教学術論の根拠を提示する。しかしこれに加えて、キリスト教教義学における救贖論は、キリスト教学術論に対してその方法論的枠組みをも提供することができる。救贖論とは、罪に墮ちたこの世界の救済のために、御子なる神が人間と同じ肉を取ってこの世に生まれ（受肉）、人間の罪を代わりに負って十字架にかかり、神の審きをその身に受けられたことにより、人間の罪からの赦しと救いが成し遂げられたことを説き明かす教理である。「贖う」とは負債を肩代わりし、いったん売却されたものを買い戻し、失われたものを取り戻して回復する意味合いを持つ。人間の罪を贖い、救いと解放をもたらしたのが、イエス・キリストの十字架の出来事である。

それではこの救贖論がどのような意味でキリスト教学術論に方法論的枠組みを与えるのであろうか。ノルはこの救贖論を含めたキリスト論全体が、キリスト教学術論に示唆する事柄について、「二重性」(doubleness)、「偶有性」(contingency)、「特殊性」(particularity)、「自己否定」(self-denial)という四点を挙げている。

第一の「二重性」は、イエス・キリストにおける神性と人性との二重性を意味している。古代教会においてカルケドン公会議が明確化したのは、イエス・キリストは「まことの神にして、まことの人」であり、その本質は混合することも変化することも、分割されることも分離することもなく、イエス・キリストという人格において統合されているということであった (Noll, 2011, 45)。このカルケドン信条に表現されたキリスト信仰を抱く研究者は、「特定の事物について一つだけではない複数の視点から知を求めるように傾

向づけられる」(Noll, 2011, 46)。光は波状であり、同時に粒状であると言われる。歴史上の一つの出来事についても、その因果連関や解釈については複数の説明が成り立ちせめぎ合う。人間の行動についてそれが自由意志によるのか、すべては決定論的に定められているのかは、哲学や心理学においても繰り返し問われ議論され続けている。こうした事柄において、キリスト教学術論は性急にただ一つの答えを求めることをせず、複数の角度からのアプローチに開かれ、慎重に吟味検討する姿勢を保つ。場合によっては複数の見解が同時に成立する可能性も視野に入れることができる。それはキリスト論のカルケドン定式に基づいて、この世界において人間の業に見えることにも、そこに神の御手が働いている可能性があることをわきまえているからである。

第二の「偶有性」とは、一般に「あるものが現在かくかくしかじかのような状態であるのは、そうでなくてはならないからではなく、そのような状態へ展開もしくは発展したからだ」ということである (Noll, 2011, 50)。この「偶有性」理解は、物事や現象の本質や理由を探究するためには、その対象のありのままを丹念に観察することが不可欠であるという学術研究の基本姿勢へとつながる。ノルは続けて言う。

偶有性が意味することは、我々が自然の仕組みや、歴史的出来事がなぜ起こったのか、ある歴史的状況がなぜ存在したのか、人間の行動の背後にどんな動機があったのかを現在や過去の中に見いだしたいのであれば、単に哲学的・神学的確信からトップダウンに思考するばかりではなくて、研究の対象としているものが何であれ、その対象に関するあらゆる証拠を可能な限り探し集めなければならないということである。(Noll, 2011, 50)

詩編においても自然世界の具体的諸事象を通じて信仰者は神の語りかけを聴き取ってきた。イエス・キリストに出会ったフィリポは、「ナザレから何の良いものが出ようか」といぶかる友人のナタナエルに対して「来て、見なさい」(ヨハネ1:46)と呼びかける (Noll, 2011, 50-51)。キリス

ト教神学においても、すべてが思弁で構成されているのではなく、その核心には神が人間とこの世界に対して御自身を開示したという啓示の出来事がある(バルト, 1995, 222-225)。神が御自身をこの世界に自己伝達され、コミュニケーションされているがゆえに、人間は初めて神を知ることができ、神との関係を体験することができ、神について語る事が可能となるのである。「祈りの法則は、信仰の法則」(lex orandi, lex credendi)という表現があるが、これも礼拝における神体験が神学の形成に昇華していくことを表現していると理解できるだろう。

第三の方法論的特徴は「特殊性」である。神が特定の時と場において御子を世に送り、イエス・キリストを通して御自身を啓示されたというキリスト教信仰の核心は、キリスト教学術論にとって個別的具體性への関心を喚起する。神の独り子はおよそ2千年前にローマ帝国が支配する西アジアの一角にあるユダヤ・ガリラヤの地で、一人の幼子として産声をあげるといふ、きわめて具体的な仕方で自己を啓示された。このことがキリスト教学術論の、個別具体的な対象への関心と探究を基礎づけるであろう。

もちろんこのことは具体的個別の多様性の中で相対主義に埋没することを決して意味するものではない。イエス・キリストの受肉と十字架の出来事は、その特殊性を通して、キリスト教信仰の普遍的救済の真理主張へと結びついている。キリスト教信仰において個別的具體性と普遍的真理主張とは相互背反ではなく、密接不可分なのである。それゆえノルが言うように、受肉の一回限りでありながらすべてにわたり効力を持つ本質は、啓蒙主義の時代のような排他的真理性主張を保持するし、同時に現代的ポストモダニズムにも近接する、具体的個別性をもたらす視座の相対性にも耐えることができる(Noll, 2011, 58)。立場や視座の置き方、文化の相違により、すべては相対化されるのであり、絶対的真理主張は不可能と考えるようなポストモダンの思惟には決して組することなく、キリスト教信仰は相対主義の世界の中にあっても、その周辺世界の思惟様式に吸収されずに普遍的真理を主張する足場を、受肉の信仰において確保しているというのである。

ノルが主張する、キリスト論がキリスト教学術論に示唆する第四の特質は、「自己否定」である。アカデミアの世界には、高慢と自己栄化の誘惑が絶えず満ちている。どれだけの論文や書籍を出版しているか、競争的研究資金をどれだけ獲得しているか、学術的功績を顕彰する栄誉の授与がどれだけあるか、学会活動でどれだけの貢献をしているか、こうした指標が学術共同体内の人物評価や昇進に結びついている。履歴書や業績報告の準備では常に自分をよりよく見せようとする誘惑が働く。研究室の閉鎖性や研究指導上与えられている権威が倫理意識を曇らせ、アカデミック・ハラスメントや研究論文不正事案も後を絶たない現状がある。社会のどのような分野や場面においてもこうした誘惑や危険性は見られるものの、教育研究共同体における虚栄や傲慢、自己栄化の罪は深い。真に神を畏れ、自己の罪を悲しみ、悔改めと再生を求める祈りが不断にささげられないところで、果たして真に健やかなアカデミアの形成が可能であろうか。

キリスト教大学において、日々大学礼拝がささげられ、あらゆる人間の営みが止められ、共同体の全構成員が神の御前に黙して進み出ることの意義と重要性も、アカデミアにおける虚栄の罪を思い見る時、いや増すことであろう。「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じように試練に遭われたのです。それゆえ、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜に適った助けを受けるために、堂々と恵みの座に近づこうではありませんか」(ヘブライ4:15-16)。どんなに偉大な学術的業績も、その人に救いをもたらすものではない。アカデミアの構成員も、イエス・キリストを信じる信仰を通して、神より与えられる無償の義によって罪からの救いを得る点においては、他のすべての人と平等である。神の御前におけるまことの畏れと謙遜を学ばないところで、真に健やかな教育研究共同体を形成することはできない。これがキリスト教大学の信仰的確信である。

以上に見てきたように、キリスト教神学におけるキリスト論は、キリスト教学術研究に対して「二重性」、「偶有性」、「特殊性」、「自己否定」という四つの特質を与え、もって学術研究の方法論

的基礎を示している。その中核にある確信は、子なる神が受肉してこの世へと降り、人間と同じ物質性をその身にとられたこと、この地上での生涯を歩み、十字架への道を進み、罪の贖いとしての死を死なれたこと、罪と死という闇の力に勝利した証として死の中から復活されたこと、そのすべてを通してこの世界に対する神の愛とコミットメントを示されたということである。

もし神がキリストにおいて御自身を現され、キリストを通して偉大なる救いの御業を成し遂げるために選ばれた道筋を、この世界と人間文化が形づくっているならば、その世界と文化は最大級の尊貴 (dignity) —そのもの自体の尊厳ではないにしても、贖いの御業の舞台として神に祝福された—尊貴を帯びていることになる。(Noll, 2011, 19)

神が「その独り子を賜ったほどに世を愛された」がゆえに、この世界とそこに存するあらゆるものは、それ自体に価値や意味があるわけではないにせよ、神が示されたコミットメントゆえに、「賦与された」意味と価値を持つことになる。それゆえに、神が愛されコミットメントを示し続けておられるこの世界内のあらゆる事象は、真剣な学術探究の営為に値するのだ。

カイパーはアムステルダム自由大学 (The Free University of Amsterdam) が創立された際の記念講演において、神による世界の主権的支配という改革派的確信から、この世界のすべてを自由な研究の対象とし、その学的探究の営為を通じて神の栄光を現すようにと学生たちを鼓舞した。「おお、我々の精神世界のどの一片も、他のものから解釈学的に切り離されているものはない。人間存在のすべての領域において、すべてのものの主であるキリストが『これはわたしのもの!』と宣言しないような場所は一平方インチたりともないのだ」(Bratt, ed., 1998, 488)。自然世界であれ、歴史であれ、人間社会であれ、人間同士のコミュニケーションであれ、人間心理の動きであれ、国家の統治や国家間の駆け引きであれ、経済活動であれ、古典や芸術作品の鑑賞であれ、生物と環境の相互作用であれ、この世界のあらゆる事物と現

象は、神の御名において、神の栄光のために遂行される学術的探究へと人間精神を招いている。

しかし一方ではこうも言えるかもしれない。特にキリスト教学術研究でなくとも、研究対象に複数の視点からアプローチすることの重要性は、広く学術研究の世界において理解されているのではないかと。個別的具体的な事象をつぶさに観察し、客観的に叙述することの重要性も広く共有されているのではないかと。キリスト教学術研究と一般の学術研究と、さほど大きな違いが見られるとは思われないかもしれない。いったいキリスト教学術研究と、信仰を前提としない一般の学術研究とはどのように異なるのであろうか。そもそも宗教的信仰が学術研究に関与する時、学術に求められる公平な客観性を維持することなど可能なのであろうか。こうした問いが想定されるであろう。

それでは仮に学術研究が「此岸的可視世界探究の層」と「目的論的世界観の層」との二つに分けられると考えたらどうであろうか。カイパーの論考に示唆を受けつつ、私はこの二つの用語を導入して、学術探究における探究の層の違いを区別したい。「此岸的可視世界探究の層」とは、カイパーの表現で言えば、この見える世界についてその諸事象を聞き、見て、測ったり量ったりして事実関係を突き止めることができる次元である。しかし、「科学が可視的観察可能な世界に固着する限りにおいては、諸事物の起源 (origin) や連関 (coherence)、そしてそれらが向かう先 (destiny) に関わる問いを扱うことさえもできないのである」(Kuyper, 2011, 71)。

これに対して「目的論的世界観の層」は、この世界がなぜ現在のように存在しているのか、世界と歴史はどこへ向かっているのか、自分の人生が今この世界に存在していることの意味と目的は何か、歴史はどのようにして終わりを迎えるのか、あるいはそもそも歴史は終局を迎えるのか否か、といった意味や目的、世界観に関わる問いを扱う。こうした問いは物理学や生物学、地質学や化学といった狭義の意味における科学 (science) が解明することのできない次元の問いなのである。哲学や神学はこうした問いと向き合うこととなる。

しかし本稿において私が主張したいのは、こうした世界観的な問いに関わる「目的論的世界観の層」が哲学や神学のみ限定されるのではなく、「此岸的可視世界探究の層」においても探究の視座を与えることができるのではないかと、ということである。それが起こる時、キリスト教学術論の地平が開かれていく可能性があるのではないかと、ということなのである。万物は「御子によって、御子のために造られた」（コロサイ1：16）のであり、御子が十字架の血を通して、「万物を御子によってご自分と和解させてくださった」（コロサイ1：20）がゆえに、この世界のあらゆる事象はキリスト教学術研究の対象となるのであり、またそうした精神的探究活動に値するのである。

IV 終末論—キリスト教学術論の目的

古代教会の基本信条に現された古典的キリスト教信仰は、父・子・聖霊の三位一体の神を信じる信仰を表白する。この三位一体の信仰がどのような意味でキリスト教学術論の基盤を形成しているかを探ってきた。これまで父なる神を信じる信仰が、キリスト教学術論の根拠を提供し、子なる神を信じる信仰が、学術論的方法を示唆することを論じてきた。使徒信条の第三項は次のように表白する。「我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体の甦り、永遠の命を信ず」。ここではこの第三項の聖霊を信じる信仰が、キリスト教信仰に基づく学術論に対してその目的と方向性を指し示すことを明らかにしたい。

特にプロテスタント・キリスト教の改革派の流れにおいて形成されてきた教理に、第2章においても触れた「贖いの契約」がある。天地創造に先立つ永遠の昔において、三位一体の神の内なる交わりの中で、罪に墮ちる人間を贖い救い出すために、神御自身の中で父なる神と御子なる神との間に神の救済計画を巡り、契約が結ばれていたことをこの教理は説く。17世紀の教理形成期においてはこの御父と御子との間に交わされる契約における聖霊の位置はまだ不明確であったが、18世紀になるとジョン・ギル（John Gill）が神の内なる交わりにおける贖いの契約における聖霊の位置について論じるようになる（Gill, 1796, 359）。これから創造される世界における人間の墮罪と、罪と

死と悪からの救いのために、聖霊は内在的三位一体において、父なる神と御子なる神の間に交わされた契約の証人として、被造世界における神の世界経綸に参与する。特に聖霊なる神は、経綸的三位一体とも呼ばれる神の世界経綸の中で、この神の内なる救済計画を証し、人間に知らしめ、これに働きかけ、信仰をもたらし、神の救済計画を実行に移す上で不可欠な役割を果たすのである。

内在的三位一体における「贖いの契約」において契約の証人としての役割を果たしている聖霊は、経綸的三位一体として神がこの被造世界において救済計画を敢行するにあたり、その実行者・執行主体としての役割を果たす。イエス・キリストの十字架と復活の出来事が、ある人にとり、罪の赦しと救済をもたらす、その人にとっての救いの出来事となるのはなぜであろうか。聖書によれば、そこに聖霊が働き、信仰が惹起されるからである。「聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』とすることはできません」（コリント12：3）。「誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない」（ヨハネ3：5）。人は自らの意志と判断のみでキリスト者となるのではない。天地創造に先立って神に選び召されていた人間に、聖霊なる神がその意志や判断にも働きかけつつ、その人の内に信仰をもたらし、人をキリスト者へとしていくのだ。これが聖霊なる神による「贖いの契約」の人間に対する「適用」であり、救いの御業の実行にほかならない。

神の内なる交わりにおいて契約の証人となった聖霊は、神の世界経綸においては、人間に対して神とその御業を証しする「真理の霊」として働かれる。「私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方が私について証しをなさるであろう」（ヨハネ15：26）。「証しの霊」がキリスト者に内住する時、今度は神の霊を受けたキリスト者が神の恵みの御業の証人とされて立ち上がる。そこに教会という聖霊共同体が誕生するのである。

新約聖書の使徒言行録第2章が伝える聖霊降臨（ペンテコステ）の出来事は、まさにこの「証しの霊」が降り注いだ時、そこに神を証しする聖霊共同体が生まれることを指し示している。「神は

このイエスを復活させられたのです。私たちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです」（使徒言行録2：32-33）。聖霊なる神は個々の人間に働きかけて信仰をもたらすばかりではなく、信仰者の群れである神的共同体を召集する。それが証しの聖霊共同体である教会である。「神は、霊による清めと、真理の信仰によって、あなたがたを救いの初穂としてお選びになったからです」（テサロニケ2：13）。教会は「主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集ひ」（日本基督教団信仰告白）である。

聖霊なる神は信仰をもたらし、聖霊共同体である教会を生み出すのみならず、この教会の伝道のわざを通して、歴史を完成へと導く歴史の神でもある。キリスト教神学において、歴史の終局と世界の救いの完成を論じる分野を終末論と呼ぶ。しかしこの終末論はまた、歴史の終局のみでなく、歴史の終わりを見据えつつ、今をどのように生きるのかという終末論的視座と倫理的実践とも結びついている。歴史の神は、人間の自由意志を否定し抑圧してその御業を推し進めるのではない。神の霊は信仰者の霊を新たにし、霊の再生をもたらす。そしてキリスト者を神の救いの御業の道具として、その賜物を捧げて仕える者へと変えられる。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を造り変えていただき、何が神の御心であるのか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるのかをわきまえるようになりなさい」（ローマ12：2）。このことは、キリスト教精神に拠って建つ、キリスト教学術研究共同体においても例外ではないはずである。

キリスト教大学の精神基盤にあるのはキリスト教会である。教会は「キリストの身体」（ローマ12；コリント12）と呼ばれる。キリスト者ひとり一人が聖霊によって結びつき合い、キリストを頭とすることにおいて一つとされている。それが教会の姿である。ミロスラフ・ヴォルフ（Miroslav Volf）はこの聖霊の内住を通して結び合うキリスト者から成る教会全体が、三位一体の神の内的交

わりと対応し、これを映し出すと論じる（Volf, 1998, 213）。神においては父・子・聖霊の各々の位格が相対的独立性を持ちつつも、位格間の統一と調和の交わりにおいて神はただ独りの神である。そこではそれぞれの位格の相対的独立性と位格同士の相互内在的交流が同時に保たれている。「一」と「多」が内在的調和と交わりの中にある。教会は、この神の三位一体的調和と交わりを、この地上にあって指し示し、映し出し、被造世界の向かう目標を目的論的・予型論的・終末論的に体現するのである。そこで信仰者ひとり一人が神の似像として認識されるばかりでなく、教会共同体全体が神の似像となるのだ、とヴォルフは論じるのである。

それではこの教会を母胎として生まれたキリスト教学術共同体は、この終末論的視座においてはどのような姿を取るであろうか。教会がこの世界で、神の人間に対する救いに関わる契約を体現し、三位一体の神の内在的交わりへと迎え入れられる終末を先取りする霊的共同体であるならば、キリスト教学術共同体はその学術的探究の営においても、教会の持つ終末論的視座を反映するはずである。

聖書は神の恵みにおける被造物の調和と繁栄に満ちた状態を「シャローム」と呼ぶ。それはまた神との契約に招き入れられた被造物が救いの完成へともたらされる終末を予型的に映し出す終末論的響きをも持つ概念と言えるだろう。キリスト教学術共同体は、この「シャローム」の実現に向けて進む世界歴史において、神の救いの計画の中でどのような役割が与えられているのかを思い巡らし、祈り求め、御国の前進のために学術研究において何ができるのかを探究するのである。

教会が三位一体の神の内的交わりの似像であり、予型論的・終末論的に被造物の救いの完成の姿を指し示すのであれば、教会共同体はまた社会と歴史にとっても、そこにおける神の平和（シャローム）実現のための範型となるはずである。

「天にあるものも地にあるものも／見えるものも見えないものも／王座も主権も／支配も権威も／万物は御子において造られたからです。万物は御子によって、御子のために造られたので

す。御子は万物よりも先におられ／万物は御子にあって成り立っています」。 (コロサイ 1 : 16-17)

万物が御子において成ったのであるから、キリストと無関係な学術的対象はあり得ない。それゆえにノルはこう論じる。

「キリストの光は実験室を照らし、キリストの語りはコミュニケーションの最先端にある。キリストは、あらゆる相互作用における人間研究を可能にし、あらゆるいのちの源である。キリストはあらゆる人間文明の到達点に向かうために必要なものを与え、あらゆる美の究極的目標である。御子は、他のさまざまな称号に並んで、学問の道のキリスト (the Christ of the Academic Road) でもあるのだ」。 (Noll, 2011, 22)

キリスト教学術共同体は、キリストにある父なる神との交わりへと導く聖霊の共同体、教会とのつながりの中を歩む。

そこでキリスト教学術研究共同体が取り組む学術研究は、独自の視点を持つことになる。それは罪に堕ちたこの世界にシャロームと呼ばれる神の平和をもたらす、癒しと変革をもたらすための学術研究を志す視点である。個々の事実関係を突き止めたり、計測して法則性を発見したりする営為においては、キリスト教学術研究も一般的な学術研究も異なるところはないであろう。しかし先述のように、そうした「此岸的可視世界探究の層」を超えて、「目的論的世界観の層」を視野に入れるようになれば、そこには世界観や価値観が関わってくるようになる。何のためにこの科学的営為が求められているのか、得られた科学的知見をどのような目的に向かって用いるのか、人間存在にとって何が幸福であり、それに対して学術的営為はどのように貢献できるのか、こうした問いは、科学そのものの中から回答できる問いではなく、こうした問いを問う主体がどのような価値観や人生観、人間観を身につけているかによって規定される。

こうした価値に関わる内容に立ち入ることを近

代科学は避けてきた。学術研究に携わる主体が価値に関わることで、学術的客観性が維持できなくなると考えられたからである (隅谷、1981、35)。しかしそもそも絶対的な価値中立といったものが成立し得るのであろうか。どのような学術研究の分野であれ、そこに関わる人間主体がおり、その研究者の興味や関心が介在して研究主題が選ばれ追究されている。得られた知見をどのように利用するかに当っては、まさに関与する主体の価値観が問われずにはいられない (隅谷、1981、66)。原子爆弾の開発に携わり、水素爆弾の開発も推進しようとしたエドワード・テラー (Edwards Teller) は、「科学者は未知なるものを発見することが使命であってそれがどう使われるかは関知しない」と述べたが (Teller, 1950, 71)、そのような無責任な学術は今日通用しないし、通用してはならないであろう。

それゆえにカイパーはこの世界において二種類の科学が存在することになるという。それはキリスト教信仰をもって科学的諸発見の相互連関と根源的意味にまで遡及して考察する世界観 (worldview) を持った「真の科学」と、計測や計量によって明かにされる世界についての表層的データを解析することに留まる「偽りの科学」である (Kuyper, 2011, 50-56)。もし日本社会においてカイパーの「真の科学」と「偽りの科学」という用語に抵抗があるならば、これを「キリスト教的世界観を前提とする科学」と「一般的世俗的科学」と言い換えてもよいであろう。

諸結果が計測や計量や計算によって得られる事実観察により支配されている限りでは、すべての科学研究者は平等である。しかしこの低次の科学から先に進み、より高次の形態の科学に移行するなら、「自然の」人と、「霊的な」人との間の違いが関わってくる、個人の主体が結果に貢献してくることになる。この現象は決して神学という学術に限定されるものでなく、自然科学を構成する哲学的枠組みをも含めて、あらゆる霊的学術に存するのだ。 (Kuyper, 2011, 79)

キリスト教学術論にとっては、カイパーが指摘するように、自己理解や世界理解の中に含まれる

確信の真理性は、その当人にとっては、議論の末に到達するものではなく、議論の前に前提となる価値観や世界観としてすでにその人の内にあるものなのだ (Kuyper, 2019, 130)。それゆえにキリスト教学術論は世界観、価値観、人間観、人生観という諸事象の連関と意味づけを問う次元へと踏み込まないわけにはいかないし、今日のような価値相対主義に傾斜した時代にあって臆面もなく、大学は真理を探究する場であることを主張するキリスト教教育に従事するのである。

V おわりに

キリスト教学術論は明確な世界観・価値観・人生観をもって教育および学術研究に従事する。その学術論を教義学的視点から三位一体論的に素描することを試みたのが本稿である。第II章においては父なる神が天地を創造されたという創造論の視点から考察した場合、ここにおいてキリスト教学術論の根拠が与えられていることが論じられた。神が世界を創造されたからこそ、そして聖書に導かれつつこの世界の中に神の意思を見出すことができるゆえに、人間による学術探究は意味づけられ、根拠づけられているのである。

第III章では子なる神が人間と同じ肉を取り、この世に生まれ、苦難の道を歩まれ、その死と復活を通し、契約の民に罪と死と悪の力に打ち勝つ道を拓かれたことを論じる贖罪論の光の下でキリスト教学術論が考察された。キリストの受肉と贖いの契約の実行に至るほどの神のコミットメントが示されたのがこの世界であるならば、このことはキリスト教学術論にとり、「二重性」、「偶有性」、「特殊性」、「自己否定」という方法論的特徴を賦与することになる点をノルに倣いつつ素描することを試みた。

第IV章では聖霊なる神が個人を再生し、聖化させ、霊的共同体である教会を生み出し、世界と歴史の進行を導かれる聖霊論・終末論的視点におけるキリスト教学術論を考察した。贖いの契約が聖霊によって被造世界における個人と共同体において適用され、実現していく中で、新生を経験した個人と共同体は神のシャロームを実現するため、「愛のわざに励みつつ、主の再び来り給うを待ち望む」(日本基督教団信仰告白)。この聖霊論・終

末論的視点が、キリスト教学術論に神の国というビジョンに憧れつつ、シャロームの実現に参与するための「神の人造り」(近藤、2007、187)と学術研究に従事するという目的を指し示すことになる。

もちろん三位一体は相互内在的であるから、たとえば父なる神の創造においても、万物は御子において成ったと語られるし、聖霊は神の息として人間にいのちを与える神として描かれる。このように創造論、贖罪論、終末論のいずれを取り上げても、そこに三位格の関わりを看取することができるはずである。それゆえそれぞれの項目について三位一体論的に論じることでもできるであろうが、本論においてはアウグスティヌスにも遡及する「充当の教理」(doctrine of appropriation)に倣い、父なる神における創造、御子なる神における贖罪、聖霊なる神における新生と終末という帰属に拠りつつ、それぞれの観点がキリスト教学術論の形成にどのような示唆を与えるのかを考察したわけである。

こうして教義学的にアプローチする場合、キリスト教神学における創造論・救贖論・終末論はキリスト教高等教育の実践においても、三位一体論的にその根拠・方法・目的を示すことを通じて、その教育研究実践の支持基盤を構成していることが理解されるのである。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。」(ローマ11:36)

「いかなる真理も神の真理の外へは出ることがない以上、私ども人間の知性は、神の真理に照らされぬかぎりには、どうしても満足がゆかぬことがよく分かりました」(『神曲』天国篇第四歌124-126行)

※聖書の引用はすべて「聖書協会共同訳」に拠った。

〈注〉

- ¹ たとえば以下のような文献がある。Christoph Schwöbel, “The Renaissance of Trinitarian Theology: Reasons, Problems and Tasks,” *Trinitarian Theology Today*, ed. C. Schwöbel (Edinburgh: T&T Clark, 1995), 1-30; David S. Cunningham, *These Three Are One: The Practice of Trinitarian Theology* (Malden, MA: Blackwell, 1998); Stanley J. Grenz, *Theology for the Community of God* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000); W・パネンベルク『神学と神の国』(日本基督教団出版局、1972年); J・モルトマン(土屋清訳)『三位一体と神の国—神論—』J.モルトマン組織神学論叢1(新教出版社、1990年)。
- ² Noll, *Jesus Christ and the Life of the Mind*, 24にも引用。ペリカンのこの言葉はもともと1960年6月6日にヴァルパライソ大学の開学式における記念講演で述べられたものである。
- ³ アブラハム・カイパーの生涯と働きについて詳しくは以下の伝記を参照。James D. Bratt, *Abraham Kuyper: Modern Calvinist, Christian Democrat* (Grand Rapids: Eerdmans, 2013)。

〈参考文献〉

- バルト、カール(吉永正義訳)『序説 教義学の規準としての神の言葉』教会教義学I/1(新教出版社、1995年)。
- Bratt, James D. *Abraham Kuyper: Modern Calvinist, Christian Democrat* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2013)。
- Bratt, James D. ed. *Abraham Kuyper: A Centennia / Reader* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1998)。
- Cunningham, David S. *These Three Are One: The Practice of Trinitarian Theology* (Malden, MA: Blackwell, 1998)。
- ダンテ(平川祐弘訳)『神曲』完全版(河出書房新社、2010年)。
- 古屋安雄『大学の神学』(ヨルダン社、1991年)。
- Grenz, Stanley J. *Theology for the Community of God*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000.
- Horton, Michael S. *Introducing Covenant Theology*. Reprint. Grand Rapids, MI: Baker, 2009.
- 伊藤悟「キリスト教教育と神学的人間観」『北星学園女子短期大学紀要』32(1996): 17-27.
- 近藤勝彦『キリスト教の世界政策—現代文明におけるキリスト教の責任と役割—』教文館、2007年。
- Kuyper, Abraham. *On Education*. Edited by Wendy Naylor and

- Harry Van Dyke. *Abraham Kuyper Collected Works in Public Theology*. Bellingham, WA: Lexham Press; Acton Institute for the Study of Religion and Liberty, 2019.
- Kuyper, Abraham. *Wisdom and Wonder: Common Grace in Science and Art*. Edited by Jordan J. Ballor and Stephen J. Grabill. Translated by Nelson D. Kloosterman. With an Introduction by Vincent E. Bacote and a foreword by Gabe Lyons and Jon Tyson. Grand Rapids, MI: Christian's Library Press, 2011.
- モルトマン, J. (土屋清訳)『三位一体と神の国—神論—』J.モルトマン組織神学論叢1 新教出版社、1990年。
- 大木英夫『組織神学序説—プロレゴメナとしての聖書論—』教文館、2003年。
- Noll, Mark. *Jesus Christ and the Life of the Mind*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2011.
- パネンベルク, W. (近藤勝彦訳)『神学と神の国』日本基督教団出版局、1972年。
- Pelikan, Jaroslav. “A Portrait of a Christian as a Young Intellectual.” *The Cresset*. Volume 36, no. 8 (1961): 8-10. (http://thecresset.org/Pelikan/Pelikan_June_1961.html, 2021年9月25アクセス)
- Schwöbel, Christoph. “The Renaissance of Trinitarian Theology: Reasons, Problems and Tasks,” 1-30. In *Trinitarian Theology Today*. Edited by C. Schwöbel. Edinburgh: T&T Clark, 1995.
- 隅谷三喜男『大学はバベルの塔か』東京大学出版会、1981年。
- Teller, Edward. “Back to the Laboratories.” *Bulletin of the Atomic Scientists*. Volume 6, no. 3 (1950): 71-72.
- Volf, Miroslav. *After Our Likeness: The Church as the Image of the Trinity*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1998.